

総括研究報告

主任研究者 鴨下重彦*

1. 研究目的

神経系および感覚器の発達に関する諸問題、特に障害の早期発見と、チェック方法、および予防対策などに望ましいシステムを樹立すべく提言を行うことを目的とした。

2. 研究組織

研究組織は前年度に引き続き、以下のような4班からなり、各分担研究はさらに5～12名の協力者が参加した。

- 1) 障害児の発生予防対策と療育対策との連携に関する研究(分担研究者 鴨下重彦)
- 2) ハイリスク児の発達チェック方法に関する研究(分担研究者 前川喜平)
- 3) 小児の視覚発達の評価法に関する研究(分担研究者 丸尾敏夫)
- 4) 聴覚・言語障害、その発見と対策(分担研究者 田中美郷)

それぞれに期待される研究内容は以下の如きものであった。

- 1) 障害発生予防対策と障害児療育対策との間を結ぶ(障害が固定する前の)望ましい療育システム構築に向けての提言(いわゆるグレー・ゾーン対策も含む)
小児慢性疾患ハンドブックの取りまとめ(神経・筋疾患編)

*グレー・ゾーン対策

- 2) 乳幼児健診の発達チェックの充実に向けて、さらには、「発達クリニック」的な事業を実施する場合の、技術面の基盤作り(平山班でのシステム面からの研究と補完しあう)

ハイリスク児の発達チェック法のマニュアル作成

*周産期医療施設ネットワークでの小児の発達の中・長期的フォローアップ・スタディー(周産期、新生児の分野の研究とのタイアップが重要)

- 3) 乳幼児の健診における視覚のチェック、検査システムのあり方への提言

*視覚発達のチェック

- 4) 乳幼児の健診における聴覚のチェック、検査システムのあり方への提言、乳幼児健診の言語発達面のチェックの充実に向けての提言

*聴覚・言語発達のチェック

3. 研究成果

- 1) 2年度に入り、各個研究として難病ハンドブックの原稿が集まり、その内容を検討した。グレー・ゾーン対策に関する研究として、視覚認知の発達から、障害児を早期発見する試みが行われ、また低出生体重児の4ヵ月乳児健診における発達の遅れの実態、3才児以降

*東京大学医学部小児科

に診断される障害児の問題点から早期発見を
探る研究などが行われ、その他長期入院障害
児の実態調査や、先天性形成異常と発達障害
との関係、行動異常としての Gilles de la
Tourette 症候群の早期診断、乳児期にみら
れる一過性の筋緊張異常と姿勢異常に関する
研究などが行われた。

2) ハイリスク児に関する研究は新生児期の異
常、failure to thrive に関するハイリスク児
の発達チェックガイドブックも原案が作られ、
今回の報告書に含めることになった。

3) 視覚発達については、前年度までに報告し
た絵画法による検討を行い、特にランドルト
環法との比較、両者での評価の差などについ
て検討を加えた。

4) 聴覚発達については、前年度すでに行われ
た検査法を出来るだけ広く活用することを試
みた。地域により耳鼻科医の協力の得られに
くい所もあったが、新しく7つの県において
試みられ、その成績が報告され、その有用性
が確認された。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 研究目的

神経系および感覚器の発達に関する諸問題,特に障害の早期発見と,チェック方法,および予防対策などに望ましいシステムを樹立すべく提言を行うことを目的とした。